

藤村全集

第四卷

筑摩書房版

藤村全集第四卷

昭和四十二年二月十日發行

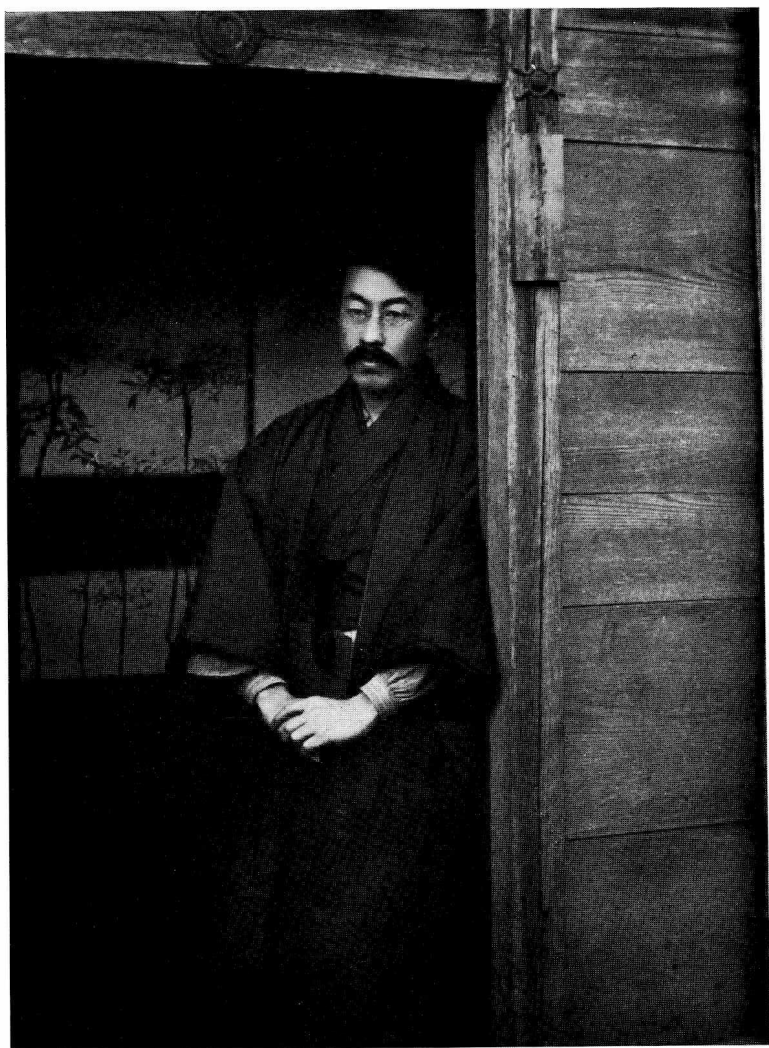
著者 島崎 藤村

發行者 竹之内 靜雄

發行所

株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話 東京四一七六五一(代表)
振替口座 東京四一二三番



新片町の家の前にて（三十八歳）

家

島崎村



(一)

橋本の家の基野では晝飯の仕度子忙しか
つと。平素でずる男の奉公人どけで、
大番頭から小僧まで入れて、都合六人の
ものが口を預けて居る。そこへ東京から
の客がある。家族を合せると六十三人の
食ふ物は作るねをあらぬ。三度々々斯の
仕度をするのは、主婦のお種を取って、
一仕度であつと。とはいへ、斯ういふ生
活に慣れて来とお種は、娘や下婢を相手
ましてまめしく働いと。
煙は廣かつと。其一部分は艶々と光る
戸棚や、清浄な板の間で、流石で用意し
とものは直みえれを爐の方へ運ぶことが
出来と。暗い屋根裏からは、煤けと竹筒
の自在鉋が釣名してあつて、その下

第四卷 目次

家

上卷 三

下卷 一九三

食後

母 四一五

船 四二七

紅い窓 四四五

孤獨 四四九

下仁田の宿屋 四五三

鶏 四六一

トラピスト	四六
秋の一夜	四七
少年	四七
刺繡	五二
汽船の客	五五
女	五九
今の愛妾	五四
人形	五一
後悔	五五
平和の日	五七
追憶	五九
病院	五七
解題	六九

家

上 卷

橋本の家の臺所では晝飯の仕度^{ひるめ}に忙しかつた。平素^{ふだん}ですら男の奉公人だけでも、大番頭から小僧まで入れて、都合六人のものが口を預けて居る。そこへ東京からの客がある。家族を合せると、十三人の食ふ物は作らねばならぬ。三度々々斯の仕度をするのは、主婦のお種^{おたね}に取つて、一仕事であつた。とはいへ、斯ういふ生活に慣れて來たお種は、娘や下婢^{きんめ}を相手にして、まめ／＼しく働いた。

爐邊^{ろべ}は廣かつた。其一部分は艶々と光る戸棚や、清潔な板の間で、流許^{ながしき}で用意したものは直にそれを爐の方へ運ぶことが出來た。暗い屋根裏からは、煤^{すす}けた竹筒の自在鍵が釣るしてあつて、その下で夏でも火が燃えた。斯の大きな、古風な、どこか嚴^{いひめ}しい屋造^{やづくり}の内へ靜かな光線を導くものは、高い明窓^{あかりまど}で、その小障子の開いたところから青く透き徹るやうな空が見える。

『カルサン』といふ勞働の袴を着けた百姓が、裏の井戸から冷い水を汲んで、流許へ擔いで來た。お種は斯の隠居にも食はせることを忘れては居なかつた。

お種は夫と一緒に都會の生活を送つたことも有り——娘のお仙が生れたのは丁度その東京時代であつたが、斯うして地方にも最早^{もとも}長いこと暮して居るので、話す言葉が種々に混つて出て來る。

『お春や。』とお種は下婢の名を呼んで尋ねて見た。『正太^{しやうた}は奈何^{どう}したらう。』

『若旦那様かなし。あの山瀬へお出たぞなし。』

斯う十七ばかりに成るお春が答へたが、その娘らしい頬は何の意味もなく紅く成つた。

『また御友達のところへ話し込んでと見える。』とお種は考へ深い眼付をして、やがて娘のお仙の方を見て、『山瀬へ行くと、いつでも長いから、晝飯には歸るまい——兄さんのお膳は別にして置けや。』

お仙は母の言ふなりに従順に動いた。最早處女の盛りを思はせる年頃で、背は母よりも高い位であるが、子供の時分に一度煩つたことがあつて、それから精神の發育が遅れた。自然と親の側を離れることの出来ないものに成つて居る。お種は絶えず娘の保護を怠らないといふ風で、物を言付けるにも、成るべく静かな、解り易い調子で言つて、無邪氣な頭腦の内部を混雜させまいとした。お種は又、娘の友達にもと思つて、普通の下婢のやうにはお春を取扱つて居なかつた。髪もお仙の結ぶ度に結はせ、夜はお仙と同じ部屋に寝かしてやつた。

主人や客をはじめ、奉公人の膳が各自の順でそこへ並べられた。心の好いお仙は自分より年少の下婢の機嫌をも損ねまいとする風である。

仕度の出来た頃、母はお春と一緒に働いて居る娘の有様を人形のやうに眺めながら、

『お仙や、仕度が出来ましたからね、御客様に左様言つていらつしやい。』

と言はれて、お仙はそれを告げに奥の部屋の方へ行つた。

東京からの客といふは、お種が一番末の弟にあたる三吉と、ある知人の子息とであつた。斯の子息の方は直樹と言つて、中學へ通つて居る青年で、三吉のことを『兄さん、兄さん』と呼んで居る。都會で成長した直樹は、初めて旅らしい旅をして、初めて父母の故郷を見たと言つて居る。二人は橋本の家で一夏を送らうとして來たのであつ

た。

『御客様は爐邊がめづらしいさうですから、こゝで一緒に頂きませう。』

とお種はそこへ來て膳に就いた夫の達雄に言つた。三吉、直樹の二人も其傍に古風な膳を控へた。

『正太は？』

と達雄は、そこに自分の子息が見えないのを物足らなく思ふといふ風で、お種に聞いて見る。

『山瀬へ行つたさうですから、復た御呼ばれでせう。』

斯うお種は答へた。

蠅は多かつた。やがてお春の給仕で、一同食事を始めた。御家大事と勤め顔な大番頭の嘉助親子、年若な幸作、其他手代小僧なども、旦那や御新造の背後を通つて、各自定まつた席に着いた。奉公人の中には、二代、三代も前から斯うして通つて來るものもある。斯の人達は、普通に雇ひ雇はれる者とは違つて、寧ろ主従の關係に近かつた。裏の畠で働く百姓の隠居も、其時手拭で足を拭いて、板の間のところにかシコマつた。

『さあ、やつとくれや。』

と達雄は慰勞ふやうに言つた。隠居は幾度か御辭儀をして、『頂戴。』と山盛の飯を押頂いて、それから皆なと一緒に食ひ始めた。

『三吉。』とお種は弟の方を見て、『田舎へ來て物を食べると、子供の時のことを思出すでせう。直樹さんやお前さんに色々食べさせたい物が有るが、追々と御馳走しますよ。お前さんが子供の時には、ソラ、赤い芋莖の御漬物などが大好きで……今に吾家でも食べさせるぞや。』

斯様なことを言出したので、主人も客も楽しく笑ひながら食つた。

お種がこゝへ嫁いて來た頃は、三吉も郷里の方に居て、まだ極く幼少かつた。其頃は両親とも生きて居て、老祖

母さんまでも壯健で、古い大きな生家の建築物が焼けずに形を存して居た。次第に弟達は東京の方へ引移つて行つた。斯うして地方に残つて居るものは、姉弟中でお種一人である。

『お春、お前は知るまいが、』とお種は久しぶりで弟と一緒に成つたことを、下婢にまで話さずには居られなかつた。『彼が修業に出た時分は、旦那さんも私も矢張東京に居た頃で、丁度一年ばかり一緒に暮したが……あの頃は、お前、まだ彼が鼻涙を垂らして居たよ。奈何だい、それが彼様な男に成つて訪ねて來た——えらいもんじゃないか。』

お春は團扇で蠅を追ひながら、皆なの顔を見比べて、娘らしく笑つた。

舊からの習慣として、あだかも茶席へでも行つたやうに、主人から奉公人まで自分々の膳の上の仕末をした。食べ終つたものから順に茶碗や箸を拭いて、布巾をその上に掩せて、それから席を離れた。

斯の橋本の家は街道に近い町はづれの岡の上にあつた。晝飯の後、中學生の直樹は谷の向側にある親戚を訪ねようとして、勾配の急な崖について、折れ曲つた石段を降りて行つた。

三吉は姉のお種に連れられて、めづらしさうに家の内部を見て廻つた。

『三吉、こゝへ來て見よ。是は私がお嫁に來る時に出來た部屋だ。』

斯う言つてお種が案内したは、奥座敷の横に建増した納戸で、箆笥だの、鏡臺だの、其他種々な道具が置並べてある。襖には、亡くなつた橋本の老祖母さんの里方の縁續きにあたる歌人の短冊などが張付けてある。

『私が橋本へ來るに就いて、髪を結ぶ部屋が無くては都合が悪からうと言つて、こゝの老祖母さんが心配して造つて下すつた——老祖母さんはナカ／＼届いた人でしたからね。』とお種は説き聞かせた。

『へえ、其時分は姉さんも若かつたんでせうネ。』と三吉が笑つた。

『そりやさうサ、お前さん——』と言ひかけて、お種も笑つて、『考へて御覽な——私がお嫁に來たのは、今の仙より若い時なんですよ。』

藥研で物を刻す音が壁に響いて來る。部屋の障子の開いたところから、斜に中の間の一部が見られる。そこには番頭や手代が集つて、先祖から斯の家に傳はつた製藥の仕事を勵んで居る。時々盛んな笑聲も起る……

『何かまた嘉助が笑はして居ると見えるわい。』

と言ひ乍ら、お種は弟を導いて、奥座敷の暗い入口から爐邊の方へ出た。大きな看板の置いてある店の横を通り過ぎると、坪庭に向いた二間ばかりの表座敷がその隣にある。

三吉は眺め廻して、『心地の好い部屋だ——どうしても田舎の普請は違ひますナア。』

『こゝをお前さん達に貸すわい。』と姉が言つた。『書籍を讀まうと、寢轉ばうと、奈何なりと御勝手だ。』

『姉さん、東京から斯ういふところへ來ると、夏のやうな氣はしませんね。』

『平素は斯の部屋は空いてる。お客でもするとか、馬市でも立つとか、何か特別の場合でなければ使用はない。お前さんと、直樹さんと、正太と、三人こゝに寝かさう。』

『ア——木曾川の音がよく聞える。』

三吉は耳を澄まして聞いた。

間もなくお種は弟を連れて、店先の庭の方へ降りた。正太が餘暇に造つたといふ養鶏所だの、桑畠だのを見て、一廻りして裏口のところへ出ると、傾斜は幾層かの畠に成つて居る。そこから小山の上の方の耕された地所までも見上げることが出来る。

二人は石段を上つた。掩ひ冠さつたやうな葡萄棚の下には、清水が溢れ流れて居る。その横にある高い土藏の壁は日をうけて白く光つて居る。百合の花の香もして來る。